

痛い痛いのとんでゆけ（その六）

——友達の輪の中で——

蕪木寿江

十一月五日

登園するとすぐ年少組に行き、積木を重ねてお部屋をつくりままたことをする。エプロンをかけて木の葉やどんぐりを使ってご馳走をつくり呼びにくる。手をひっぱって連れてきて、「なんのご馳走でしょう？」と問いかける。「木の葉のポテトチップ」と答えると、「そうです」と満足そう。時々事務所に行くが、書類をいじらないですぐに戻りままたことの続きをする。「そのまま、そこで遊んでいいわよ」と言われたが、お弁当の用意をしないでままたことを持って自分の部屋に引越しをする。そして又続きをする。折紙の切れ端のご馳走が散らばってしまったのを「片づけられない、できない」と言って実習生に片づけて貰う。各組からお布団やぬいぐるみを持ってきた。「象さんが生れたの？」と聞く

と、「赤ちゃんが生れたの？」と言って」と言う。転勤で退園したまことちゃんにあげる絵を描いているとK夫も描いた。そして、「まことちゃん、どこへ行ったの？」と何度も繰り返し聞いて聞いた。お弁当は食べなかった。お母さんが迎えにくると、「どうして僕だけ早く帰るの？」と言ってさっきのままごとを始めた。それから例の地図を描いていたが、（この地図をかく時はどうしてよいかわからない、不安定の時のような気がする。）お母さんと一緒に帰った、と思ったら途中で幼稚園に戻ってきた。お母さんが青くなって「家にいませんけれど」と心配した。

雨あがり、すのこが泥だらけになったので（工事中的こともあり）「よごさないでね」と紙に書いて貼っておくと、それをK夫が読み、雑巾を持ってきて一人で拭いてくれた。

十一月六日

風邪気味だけれど「電話をかけても通じなくて」とお母さんが言われて登園してきた。すぐ昨日のおままごとの続きを積木を並べて部屋をつくった。友達も大勢手伝ってくれた。どんぐりや木の葉を使ってよく遊んだ。他の先生も呼んできてはご馳走を食べさせた。りして楽しそうだった。こんなにのどかな日が、こんなに早く来るとは思わなかった。お弁当にうどんとお粥を持ってきたが、（白いものなら食べられるようになってきたが）かぜ気のせいか食べなかった。「帰りたくない」と言いながら帰る。

十一月七日

登園した瞬間から「今日は何して遊ぼうかな」という表情をしていた。「おままごとする？」と聞くとストーブのある場所に積木を運んでお家を作った。名札を見ながらだっただけれど友達の名前を呼んで一緒に作った。くじをつくって、「白いいのはいい、赤い色を引いた人は、はいっただめー」と言ったのでだんだん友達が少なくなってきた。「お友達がいなくなっちゃう」と悲しそうな声をあげる。しばらく遊んでから、みさこちゃんにひっぱられながら嬉しそうに、てれくさそうにリズムをする。紙芝居になると又不安定になり、前へ行ったり、後へ来たりしていつの間にかいなくなり事務所へ行ってしまった。お母さんが迎えにくる。「僕だけどうして帰るの？」と何度も聞く。「お遊戯ができるようになってね」とお母さんが言う。「僕、七・五・三のお遊戯したのに……」と言いながら引きずられるようにして帰る。

十一月八日

砂遊びをしたり、園長とボールで遊んだ。ボールがくると恥かしそうにしながら蹴っていた。お誕生会なので、「並びましょう」と言うと、とても辛そうないやな顔をした。友達がホールに入ってしまったら一人で部屋にるのが淋しいのか、一度来て見たが入らず、年少の部屋に自分の道具を持って行って、七・五・三の鈴の袋を先生と一緒につくった。それを飾ってもらい嬉しそうに眺めていた。ホールで映画が始まると後ろの方から入

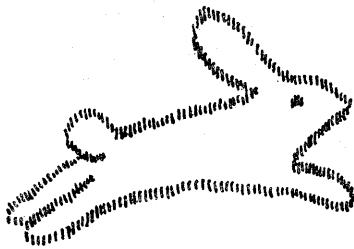
ってきて興味深そうに初めて最後迄見た。お母さんが迎えにきたので「映画を見たんですよ」と話すと、「物語りのようなものですか?」と聞かれるので、「そうです。よく内容がわかって見ていましたよ」と答えると、「そんなことありえなかったですが……」と半信半疑であった。「K夫はそういう子だ」と、お母さん自身が一つの枠をきめてしまっているような気がする。まだまだ六歳——、人生始まったばかり——。

十一月九日

台所からお誕生会のお菓子を持ってきて、自分はラムネ、友達には飴を配って歩いた。食物に興味が出てよかった。それからカルタを持って年少組の部屋に行きしばらく遊んだ。年少さんのお誕生会で皆ホールに行ってしまうと先生と外で遊んだ。じゃんけんをするといつもあとだしをして負けることを考えついたようだ。ともちゃん、たかしちゃん、ゆうちゃんとよく遊んだ。切手や印刷物やその他の物ではなくて、友達と一緒によく遊んで、友達と遊ぶようになったのがなんと言っても大きな成長である。

十一月十日

登園するとしろ組へいっておままごとを始めた。K夫



はお父さんになり、「男の子はませない」と言っていた。あきちゃんが、「男の子もませてあげていいでしょう」と言ったがゆずるちゃんを押しつけて女の子とばかりと遊ぶ。しばらく遊ぶとおままごとの道具を全部持って自分の部屋に帰ってくる。「わたしのまね」をピアノに合わせて友達がしていると、自分も少し体を動かしていた。エプロンをかけたままピアノに合わせて歩いたり走ったりした。K夫がいる間は紙芝居は止そうと思っていたが「今日は大丈夫かな」と思っていると又不安定な状態になってきた。「絵を見てはわからない、字を読まないと言っていることがわからない」と言いながら後ろの字を読んでから前にまわって見るというふうは何度もしていた。絵を見て話を聞いて想像するというごく自然のことがK夫にはむずかしいことなのだろう。

十一月十二日

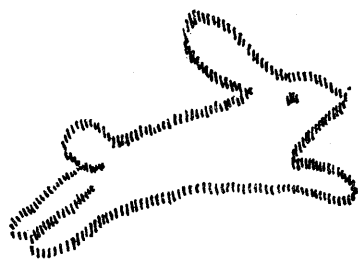
お店屋さんの品物をつくり始めているところへ登園してきた。「小さい組につくってあげてね。年少さんが買いくるのよ」というと嬉しそうに一緒になってつくった。できあがったものをみて「これはよくできているから二千四百万円、これは千円」といいながら漢字で定価を書いた。お金という夢中で沢山つくるので、お店やさんごっこのお金は「木の葉にしましょう」と話し合う。それでもお金ばかりつくるので「年少さんの喜ぶものをつくりましょうよ」というとお金をやめて、めがねや望遠鏡を友達と一緒につくる。お弁当になったので「K夫ちゃん今日はどこに座るの?」と聞くと「今、考え中」と言

って黒板に一人で描いていたので「K夫ちゃん、どこに座ろうか、って考えているんですけど」とみんなに話すと「ここに座ってー、ここにきてー」と、大勢が声をかける。まきちゃんの隣に座るとみかんをぱつと取った。まきちゃんが「一つはあげないわよ」と言っ
て半分にしたがそれは食べずにカールだけ少し食べた。友達が持っている食物に興味を示したのも初めてのことだ。

十一月十三日

兎小屋に友達が入って抱っこしていると自分も入り「今、可愛いがっているのです」と言っ
て二十分以上も餌をあげたり撫でたりしていた。餌を食べなくなると「今おなが一杯なのかな？」と先生に話しかけていた。(兎も見えなかったのに、三月号参照) 部屋に入
ってきて売り屋さんの品物をつくり始め一時間半集中してやる。友達の持っている箱が欲しくって「ください」と言った。「同じ箱はないのよ」と言うと「すぐください。四秒以内ください。一秒・二秒・三秒……」と数える。涙をパァッと浮かべるが、今迄のように泣き叫ぶことは全くなかった。

十一月十四日



お店屋さんごっこの品物が並んでいると、両手でガシャガシャかきまわしただしたので外へ誘う。車屋さんになって人が乗っているように「お花畑をお願いします」「はい、よくつかまって下さい」「兎小屋をお願いします」「はい、つきました」と言いながら一人で遊んでいた。部屋に入ってきて「カメラが足りないからつくって下さい」と言ったり「このお面をお願いします」と言っていた。自分が早くお店屋さんになったのか年少さんにある屋台を持ってきた。友達がいるいと並べて売り屋さんにしてくれたが、そのうちに年少さんのお店の看板もはがしてみんな持ってきてしまった。「お友達は沢山いれば楽しいけれど、こんなにいっぱい持ってきてしまうと小さいお組さん困っているわよ」と言うと、涙は流さないが眼の周りを真赤にして話を通じたようだった。「このはやさん」という名前のお店屋さんにした。その看板の裏に「よくばりさんは、はいれません」と書く」と「よくばりってなあに？」と聞くので「何でもかんでも沢山欲しがらんよ」と言うと、「よくばりは誰？」と聞くので「ここには誰もいないわね」と話すとうなずいていたが、結局、看板をかかえる程持つて家へ帰った。

十一月十六日

「お店屋さんがない」と言っに入ってきた。昨日の様子では折角のお店屋さんごっこもK夫の混乱を誘うようで一部かたづけしてしまったのだが、又、ダンボールを重ねてガムテープでとめて先生と一緒に売り屋さんの台をつくった。「どうしてお客さんがこなくなっ

たの？」と悲しそうである。「又、おもちゃをつくって並べましょう」と言うとはつとした顔になる。しばらく空箱でつくっていた。「お弁当を食べてから続きをしましょう」と言ったがふり向かなかった。「K夫ちゃん、どこの席で食べようかな、って言っているわよ」と言うと、又みんなが「ここにいらっしやい」と呼んでくれた。とても嬉しそうににっこり笑う。「お当番さんと一緒に牛乳を配る？」と聞くと喜んで配った。「のりえちゃんがまだない、って言ってるわよ」と言うと、一人、一人の顔を覗いて持っていた。続いて年少組まで配り始めた。それから先生の隣でお弁当にした。お母さんが迎えにくると又、「僕だけどうして帰るの？」と言うので、K夫の気のすむまで遊んで帰った。

十一月十七日

走ってきてすぐお店屋さんを始めた。お金にこだわらずつくったり、売ったりしていた。外で焚火をしているので「K夫ちゃんも外に行ってみる？」と言うと、とびはねて外へ行き焚火を囲んでリズムをしていた仲間の中に入った。どの友達とでも手をつないで生き生きとしていた。二・三度、土をかけてふざけていたが、「火が消えてしまおうわよ」とそおっと話しかけると、もうやらなかった。そして又友達と手をつなぎ「垣根の、垣根の曲り角……」と小さい声で歌っていた。K夫のはずんだ足どりが、友達の前で何度も円を描いてまわった。

(市が尾幼稚園)